

氏名（本籍）	福定 正城（愛知県）		
学位の種類	博士（社会福祉学）		
学位番号	甲第90号		
学位授与の日付	2024年3月16日		
学位授与の要件	学位規則第5条第1項の規定該当		
学位論文題目	世帯の社会的脆弱性に対するアセスメントと対話に向けた実践・実証研究 —介護支援専門員等への支援ツール開発・運用—		
研究審査委員	主 査	斉藤 雅茂	日本福祉大学 教授
	副 査	平野 隆之	日本福祉大学 教授
	〃	児玉 善郎	日本福祉大学 教授
	学外審査委員	斎 藤 民	国立長寿医療研究センター 老年社会科学研究部 部長

論文内容の要旨

本論文は、生活困難が複合化した世帯が抱える「世帯の社会的脆弱性」に着目し、その見える化にむけたアセスメント方法の開発から、当該指標の活用にむけた介護支援専門員等への研修プログラムの開発と評価、世帯の社会的脆弱性スコアが高い世帯に対する対話にむけた支援実践までを試みたものである。氏が現役の介護支援専門員であることを活かして、文献研究に加えて、介護支援専門員や社会的脆弱性スコアが高い世帯を対象にした多様な定量・定性調査を展開した挑戦的・意欲的な研究である。本論は、序章・終章を含めて、Ⅲ部・12章（本文144頁、資料13頁、引用文献191点、図表64点）で構成されている。

序 章（実践者としての不安全感から世帯の社会的脆弱性への着目）

第Ⅰ部 世帯の社会的脆弱性の定義・問題の所在

第1章 世帯の社会的脆弱性とは何か

第2章 世帯の社会的脆弱性をめぐる背景

第3章 世帯の社会的脆弱性にかかわるこれまでの言説と実践上の課題

第Ⅱ部 世帯の社会的脆弱性の測定・評価

第4章 アセスメントに向けた「世帯の社会的脆弱性尺度」の開発

第5章 簡易スクーリングに向けた短縮版尺度の開発

第6章 脆弱度の判断に向けたカットオフポイントの検討

第Ⅲ部 世帯の社会的脆弱性への実践

第7章 介護支援専門員等を対象にしたアセスメントスキル習得のための研修プログラム開発

第8章 全4回の研修プログラムの試行

第9章 脆弱性スコアの高い世帯の子との対話に向けた支援ツール開発

第10章 全6種のテーマの対話に向けた支援ツールの試行

終 章（総合考察と限界・今後の課題）

第Ⅰ部（世帯の社会的脆弱性の定義・問題の所在）では、文献レビューに基づいて、世帯の社会的脆弱性の定義から、その背景とこれまでの言説を概観している。本研究では「世帯の社会的脆弱性」を世帯単位において社会関係に脆弱性を抱えている状態と捉え、「世帯においてセルフケアおよび適

応に課題があるものの、自ら外部とのつながり・支援を求めず、社会生活上の脅威にさらされた場合に不利益を受けやすい状態」と定めている。とりわけ高齢者と子世帯では、世帯ごと社会的に孤立するリスクが高く、子がひきこもりである場合に親の孤独感や罪悪感等により外部への援助要請が明確でなく、経済的な安全が保たれる状態になく容易に生活水準が低下しやすいこと、親の介護という新たな事態に対処できず虐待の発生リスクが高いこと、支援拒否のある世帯に対する支援策は確立されず、研究の蓄積は進んでいないことなどを提示している。

つづいて、第Ⅱ部（世帯の社会的脆弱性の測定・評価）では、過去に実施した介護支援専門員3名へのインタビュー調査の知見を踏まえ、世帯の社会的脆弱性の高い世帯への支援効果の測定・共有、および、支援者間での合意形成にむけたアセスメントツールとして「セルフ・ネグレクト」「社会的不適応」「社会的孤立」という3因子・19項目（それぞれ「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の4件法）で構成される世帯の社会的脆弱性尺度を開発している。愛知県内の地域包括支援センターで対象世帯への支援経験を有する人を対象にした質問紙調査（307名）に基づいて、探索的因子分析による因子的妥当性に加えて、支援困難感スコア等との基準関連妥当性、内的整合性による信頼性を有することを確認している。また、同データに基づいて、より簡便にスクリーニングするものとして6項目で構成される短縮版尺度を開発している。その後、感度と特異度、ROC曲線の曲線下面積に基づいて、19項目版では45点以上、短縮版では13点以上が、より深刻な世帯の社会的脆弱性傾向にあるというカットオフポイントを提案している。

第Ⅲ部（世帯の社会的脆弱性への実践）では、上記のアセスメントツールを基盤にして、介護支援専門員等へのアセスメントスキル習得に向けた研修プログラム、および、世帯の社会的脆弱性軽減にむけたアウトリーチ時に用いるプログラムの開発と試行を展開している。前者については、居宅介護支援事業所等に所属する29名への質問紙調査、および、7名への追加調査に基づいて、【支援効果が実感・共有できない】【支援者間で共通理解を得られない】など当該トピックに関わる研修ニーズを把握し、全4回（各102～120分）の研修プログラムの開発に至っている。経験学習理論に基づいた反転授業・ゲーミフィケーションの考え方を取り入れたことで、参加者の満足度が全ての回で高く、アセスメントスキルと支援者間の共通理解促進により、高齢者と子世帯への支援に関する自己効力感が向上し、エンパワメントにつながることを示唆されている。後者については、現在およびかつての高齢者と子世帯の世帯員3名を対象にしたインタビューによって【世帯の状況を否定されたくない】【金銭的な不安を軽減したい】等のニーズを確認し、全6種（各30～120分）選択式のプログラムを開発している。世帯の社会的脆弱性スコアが高い世帯の子4名に対してプログラムを試行したところ、世帯の社会的脆弱性得点がやや軽減しており、世帯の子と介護支援専門員との「対話」が生まれるきっかけとして、有用なツールになり得ることを提示している。

終章（総合考察と限界・今後の課題）では、本研究の限界としては、対象地域が限定的であること、研究対象となった人々が既に介護支援専門員とはつながれているという意味では極端に深刻な脆弱度ではないこと、社会的脆弱性を取り巻く社会福祉制度の不備や申請主義等の社会構造上の問題までの分析・考察には至っていないことなどが言及されている。他方で、本研究の新規性・意義として、①世帯の社会的脆弱性概念および先行研究を整理したこと、②当該概念に対するアセスメントツールを提示できたこと、③当該ツールを活用したアセスメントスキル習得や支援者間での共通理解促進のための研修教材、および、プログラムを開発・試行したこと、④介護支援専門員等がアウトリーチの際に用いる脆弱性スコアの高い世帯の子との対話に向けた支援ツールを開発・試行し

たことを挙げている。それを踏まえて、世帯の社会的脆弱性予防・軽減への支援に向けて、介護支援専門員等が世帯の社会的脆弱性に着目する意義の共有の必要性、「対話」志向のアプローチに関する蓄積の必要性、ポピュレーション・アプローチに関する蓄積の必要性を指摘している。

論文審査結果の要旨

1. 審査経過

2023 年 10 月 12 日の第 6 回福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において、福定正城氏の第 1 次審査（秋季）博士学位審査請求論文が受理された。学内審査委員 3 名（斉藤雅茂、平野隆之、児玉善郎）は、それぞれに提出論文を精査した上で、同年 11 月 15 日に対面で書類審査および口頭試問を実施した。本論文の概括的評価と論点について意見交換し、その場で修正すべき箇所を確認した。同年 12 月 14 日第 8 回大学院福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において第 1 次審査は合格となった。その結果を受けて、同年 12 月 16 日に公開発表会（名古屋キャンパス）に臨んだ。口頭試問および公開発表会における指摘事項について加筆・修正を行ったうえで、2024 年 1 月 5 日に最終稿が提出された。その後、同年 2 月 9 日に最終試験（口頭試問・対面）を実施し、同日中に学内審査委員 3 名による最終試験の結果について審議した。学外審査委員の斎藤民氏（国立長寿医療研究センター老年社会科学研究部部長）からの審査報告書（2024 年 1 月 29 日付）を総合して、本論文は博士（社会福祉学）の学位授与にふさわしいとの結論に達した。

2. 論文の評価

福定氏の提出論文は、以下の 3 点で学術的な新規性と独創性を有している。第 1 に、高齢期の世帯単位での社会的脆弱性に着目したことである。引きこもりや社会的孤立、8050 問題などの今日的な社会福祉の実践課題に対して、「世帯の社会的脆弱性」という観点から介護支援専門員等によるアセスメントと対話の実現を目的とした点で新規性を有しており、社会福祉学の博士論文として大きな意義がある。第 2 に、「世帯での社会的脆弱性」に関して、7 つの異なる調査を独自に設計・遂行し、量的・質的な実証的分析法を多様かつ適切に組み合わせて、議論を展開している点である。なかでも、先進事例の記述・整理や関係者へのヒアリングに留まらずに、確認的因子分析といった高度な統計解析を駆使して、簡易版を含む 2 種類の「世帯の社会的脆弱性尺度」の開発、および、カットオフポイントの提案にまで成功したことは本研究の重要な成果といえる。第 3 に、課題の記述や関連要因の解明のみに留まらずに、社会福祉実践上の解決を志向している点である。関係者および当事者へのニーズ調査に基づいて、「世帯の社会的脆弱性」に関するアセスメントスキル習得に向けた全 4 回（各 102～120 分）の研修プログラムと、世帯の社会的脆弱性スコアが高い世帯との「対話」にむけた全 6 種（各 30～120 分）選択式のプログラムを提案している点、予備的・記述的な評価には留まっているが、それぞれ一定の成果を上げている点は高く評価できる。

学外審査委員の斎藤民氏は、介護支援専門員としての実務経験において得た着想をもとに、事例データ検討による確認を事前に踏まえて研究に発展させたものであり、実践的であり、かつ科学的でもあるテーマ設定となっており、社会福祉学専攻における学位論文としてふさわしいものと評している。本稿で提案した尺度のさらなる精緻化や、提案したツールに対する他の介護支援専門員によるユーザビリティ評価、親子間での利害対立が生じた際の支援方法等に関するさらなる分析・考察といった課題も指摘された一方で、広い文献検討、研究計画立案、研究技法の習得、データ取得、解析、執筆を精力的かつ着実に実施していること、文献レビュー、インタビューと質的分析、尺度開発のための

量的解析、介入プログラム開発、効果評価などを適切に体得していること、本論文を構成する章のおよそ半数はすでに査読つき原著論文として採択された複数の論文から構成されていることといった点で福定氏の博士論文を高く評価されている。

審査委員からは今後の長期的課題として、①本研究では社会的脆弱性の中でも専門職がつながることすら困難であるようなより深刻なケースの分析には至っていないこと、②介護支援専門員を中心に議論が展開されていたが、当該課題に対する支援の担い手としては地域包括支援センターや社会福祉協議会、民生委員などさらに広い対象が考えられうること、③社会的脆弱性の「社会的」や「役割(期待)の解放」といった用語がやや限定的に捉えられていて、より拡がりをもった考察を展開する余地があること、④本研究の意義・強みの見せ方にさらなる工夫の余地があることなどが指摘された。他方で、この間の口頭試問や公開発表会でなされた指摘事項に対して真摯に対応し、短期間に適切な修正を加え、博士論文としての完成度を高めてきた点は非常に高く評価された。また、福定氏は本学博士課程に在籍した3年間で、筆頭および責任著者として査読付き論文を5本、学会発表を5編発表し、第22回日本ケアマネジメント学会大会発表優秀賞を受賞するなど、本領域で精力的に研究成果を発信してきた点も高く評価できる。今後改善すべき、また、取り組むべき理論的・方法論的な課題は少なくないが、論文全体としての完成度は高く、社会福祉学の課程博士論文として十分な水準にあるものと評価された。

3. 最終試験（学力の確認）の結果

2024年2月9日に最終試験（口頭試問）を実施した。福定氏より事前に用意された口頭試問提出資料に基づいて、第1次提出以降の修正点とその理由について簡潔に説明された。それを受けて、審査委員から本研究に残された課題を中心に質疑等が行われ、いずれも誠実かつ真摯に回答された。さいごに、語学力の審査として、提出された“Abstract of doctoral dissertation”の一部についてリーディングと意識を実施したところ、ともに正確に行われた。本文において多数の英語論文・学術書が適切に引用されている（全191点の引用文献のうち、37点が英語論文および学術書（訳書を除く）であった）ことから博士学位に相応しい英語力を有すると判断した。

4. 結論

福定正城氏は、日本福祉大学学位規則第12条および第5条第2項に基づき、博士（社会福祉学）の学位を受けるに相応しいと認め、学位論文審査について合格と判定した。

以上

